月曜評論

昭和50年11月10日　第250号　（毎週月曜日発行）

発行所
東京都渋谷区千駄ヶ谷1－9－9
郵便番号151　電話　402－3646
株式会社　月曜評論社
編集兼発行人　楠谷繁雄
振替口座番号　東京163103
1部80円　1ヵ年4,000円（送料共）

昭和46年2月23日第3種郵便物認可

東南アジアと中国と水滸伝批判

中嶋嶺雄

ハノイからのびる共産ゲリラ

東南アジアは、また一方で中国人の世界でもある。そこに住む中国人を華僑と呼ぶか、華人というべきか、あるいはOverseas Chineseと一括すべきかの論議はさておき、アジアの中国人の意識はいま大きく揺れ動いているようだ。

いわゆる僑生Babaが多く、若者のあいだでは、ますますその傾向が強いこととともあいまって、彼らにとって中国とは、まず第一に香港や九龍なのであって、北京や上海は、もう西の天竺国のようないうまでもなく、中国の国際的な抬頭、インドシナ情勢の急変、マレーシア、フィリピン、タイの対中国交正常化など中国をめぐる国際環境に大きな変動があったからである。

だが、同じ東南アジアでもマレー半島のペラ州あたりまでくるとやはり中国は遠い感じがする。このあたりは広東人、潮州人が多いためか、州首のイポの街では、香港とか九龍の文字をつけた店の看板を見かけることが多い。ちょうど、香港でよく上海とか北京といった名前の店が多いのが、ここでは香港酒家飯店とか九龍美装院とかなるのである。このあたりは、中国語をまったく話せない中国人が存在なのであろう。マレーシアのペラ州、ケダ州一帯は、今日、いわゆる共産ゲリラの動きが活発化していて治安が悪く、その日に新たに戒厳令がしかれた地域にも私は滞在することになったが、現地の華人たちは、共産ゲリラの背景にいまや北京ではなく、ハノイの影を大きく見ているようである。マレー半島と中国とのあいだには今日、インドシナという東南アジア最大の"軍事大国"が出現したのだから、この見方は無理もないところである。もとより、対中国交を実現したラザク政権にとって最近とみにMCP（マラヤ共産党）の動きが活発になり、しかも中国がこれらアジアの共産主義勢力への援助を再開していることは頭の痛いところであるが、一方、タイの場合は、状況が大きく違っている。私は今回、東南アジアの「中国の影」の新しい陰影を求めて、シンガポールからバンコクまで、マレー半島を汽車を乗りついで縦貫旅行したのだが、バンコクにくると、街の映画館に先のククリット首相一行訪中の映画の看板がかかげられ、毛沢東とククリットの二人の大きな像が並んでいたのを目撃した。しかも、その毛沢東は、まさに東方の旭日であるかのように若々しく描かれている。タイが中国へ接近しつつあることの大きな背景には、ハノイの脅威にたいして安全保障を求めるという外交方針が潜んでいることは否めないにしても、この国にとって中国との国交樹立は、その中国起源の民族的属性からしても、タイの国際関係史からいっても、まさにわが国の明治開国と同じような意味をもつようにも思われる。そのような熟案を成し遂げたククリット政権としては、中国をまさに「東方紅」として描く必要があろうし、決して偽だらけの中国であったり、若齢化した毛沢東であってはならない。タイは、国交正常化による中国ブームがいまようやく鎮まりかけたところだが、対中感情の好転ぶりは驚くほどである。しかも、この国は、たとえばインドネシアやビルマのように、中国によって脅威を受けてはいないだけに、まだ免疫が出来ていないのであって、当分、このような中タイ関係はつづくであろう。

免疫といえば、多くの東南アジア諸国は、「中国の影」と日常的に対応せざるを得ないがゆえに、中国をリアルに見ており、肌で中国を感じているというのが私の持論であるが、しかし、タイにしてもマレーシアにしても、フィリピンにしても、どの程度まで中国を研究し、中国の内政や外交政策を分析しているかというと、まったく心もとないのが現状である。つまり、これらの国の対中政策決定過程には、中国研究や中国分析が（シンガポール）、スハルト（インドネシア）、マルコス（フィリピン）などは、ブルジョアジー、大地主の代理人であり、おそかれはやかれ歴史のゴミダメにすてられてしまう結末にいたるであろう」と述べたことなども、どの程度つかんでいるのか疑わしい。いわば、対中国政策については、それほどナイーブな状況にあるのである。

ところで、右の喬冠華演説についてであるが、私自身、日本で二カ月も前に入手していたこのテキストが台湾の『中央日報』や香港の華字紙にも発表されて、香港でも話題を呼んでいた。一部にその信憑性をいぶかる向きもあって、その論拠は、喬冠華演説のなかに「第一と第二の世界の間の真空地帯」といった表現があり、中国で第一地帯とか真空地帯という言葉は使わないはずだというものであった。ただし、この点については喬冠華演説は、天津市各部門幹部への非公式談話であるから「第一世界」という言葉を用いることもあり得ようし、また"真空"という表現については、『人民日報』七月二十九日付の任谷平署名論文「前門の狼を拒み、後門の虎を防ごう」も、「アメリカ帝国主義が従来埋めてきた"真空"には…ソ修勢力がまた大規模に伸長してきた」という表現があることを、香港からシンガポールへの機中で私は、最近の国際関係についての公式論評を集めた香港三聯書店版『当前的国際形勢』を読んでいて気がついた。

議論百出の「水滸伝批判」

ところで、東南アジアの入口でもある香港は、また一方で中国の南の玄関でもあるだけに、中国は本当に近くに感じられる。香港が依然として中国分析の基地であることの位置も当分は変らないだろう。その香港は、いわゆる水滸伝批判をめぐる謎解きがすでに始まっているが、香港の紙誌もまだ議論百出の観がある。「目前の形勢急を告げ、現代の宋江を鎮圧」として、鄧小平を宋江に擬した小冊子「誰が現代の宋江か？」と題してやはり鄧小平を指摘する論文、「王洪文、形勢悪し」として王洪文が杭州事件との関連で批判されているのではないかという論説、やはり宋江は周恩来だとする意見など、日本の週刊誌が飛びつきそうな話題で満ちている。一方、中国系の公認書店ともいえる商務印書館をのぞいてみると、はやくもこの七月下旬には、『水滸新談』（魏羅著）と題する一種の水滸伝新釈が出版されたのにつづいて、この九月上旬には、同じ著者の『梁山与梁山英雄』が出版されて話題を呼んでいる。やはり、香港は中国の動きに敏感に反応するところであり、同じ中国人社会でもこの点でシンガポールとは大きく異なっている。

私は、いま、バンコクから香港へ向う機中でこの稿を草しているが、眼下に西沙群島の珊瑚礁群が美しくひろがっている。サイゴン陥落以降、かつての南ベトナム軍占領下の西沙群島には北ベトナム兵が派遣されたといわれているが中国もこのところあいかわらず西沙群島の人民公社の発展ぶりなどをしきりに喧伝しており、北京にとっては、ハノイのこのいちはやい行動は許せないところであろう。中国の水滸伝批判は、先の杭州事件とともに、毛沢東以後の時代への時間が切迫しているなかで起っているところに大きな意味があり、とくに下部労働者からの質上げ要求や物資的刺激を求める声が爆発した杭州事件のもつ含蓄は重要であろうが、その対外関係の小さな試金石である西沙群島の問題一つをとってみても、事態はけっして単純なものではない。こうして中国は揺れ、アジアはなお動きつづけるのではなかろうか。

（東京外語大助教授）

揺れ動く中国の"影"

月曜寸言

郵便料の値上げ

辻村明

徹夜国会で、やっと値上げ三法案が衆議院を通過したが、参議院は保革伯仲のため、また予断を許さない情勢である。一般庶民としては、何事によらず、値上げのないことの方が望ましいが、他の諸物価と比べて、公共料金が不当に安い場合には、ある程度の値上げはやむをえまい。私は今回の酒・たばこ・郵便の値上げはやむをえないものと思っている。

しかし郵便についてだけは、値上げに際して、次のような事情を考慮してほしいと思うし、考慮すべきものだと思っている。それはどういうことかというと、一定の期日から値上げになるのだが、それ以前に売りだした切手やハガキは、旧料金のままで使用できるようにすべきだということである。なぜならば、他の公共料金の場合は、すべて値上げの一定の期日以前に購入したり、手続きをとったりしたものは、その有効期限内は値上げ後も旧料金で有効だからである。たとえば、たびたびの値上げを経験している国鉄運賃でも、値上げ期日前日に六カ月の定期券を買っておけば、値上り後も六カ月間は、旧料金のままで通用するのである。また最近、話題となっている預金利子の値下げも、期日前に二年定期を組んでおけば、期日後も二年間にわたって、旧料率の高い利子がつくのである。大学の授業料にしても、値上げは新入生から適用されるのであって、在学生は据置かれるのが通例である。値上げという痛手を一般庶民に与えるのだから、たとえささいな恩典でも、それを提供して、「よろしくお願いします」という態度を示すべきだと思うのである。どうしてそれが、郵便料金についてだけは出来ないのだろうか。

多分、郵政当局の答弁としては、切手やハガキには、買ったときの日付が入っていないので値上げの期日以前に買ったものかどうかの区別がつかない、というだろう。これに対して私は値上げをキッカケとして、切手やハガキのデザインを変えれば何でもないことだと思うのである。始終、記念切手を発売しているのだから、新しいデザインの切手を発売することぐらい、大したことではないはずである。

またおそらくは、封書の新しい料金である五〇円切手は、新しく発売されるに違いない。この際、二〇円切手にせよ一〇円切手にせよ、新しいデザインのものを作ったり、あるいはデザインは同じでも色だけ変えるとかして、区別をつけたらいいのである。ハガキも当然、二〇円ハガキが新しく印刷されるであろう。だから、値上げの期日以前のものかどうかは、一目瞭然なのである。

古いデザインのものは、一〇円ハガキでも二十円切手をはった封書でも、そのようなハガキや切手が手許にある限り、旧料金で通用させるべきである。こうなると、値上げ期日直前に、大変な買い占めが起ると心配するだろうが、それはタバコについても、定期券についてもおこなわれていることである。また私の提案のようにすれば、当局が非常識な値上げをするのを抑制する効果もあるだろう。

つじむら　あきら（東大教授）

ズームレンズ

十月二十六日付朝日新聞社説に「デモの自由」と題したのがあった。朝日ばかりを取り上げるようだが、他紙よりも熱心に同紙を読んでいるものとして質問願いたい▼この社説は、佐藤訪米阻止の羽田デモ、原潜反対の大阪デモ事件が、一、二審では罰するほどの違法は認められないとして無罪になったのに、最高裁がそれをひっくり返したことを批判したものである▼社説はいう。民主主義では国民の意思は国政に反映する仕組みになっていなければならぬ。その伝達の手段は選挙の投票、マスコミ利用、集会やデモ行進への参加等だが「マスコミも大衆が自由に、直接使用できるわけではない」。そこで国民がいつでも行使できる「表現の自由」のデモ行進等には、普通に行なわれる限り、幅広い自由が許されるべきだ、と▼全く同感だ。自由な新聞である以上は、社会にある諸グループの意見を反映し、そのフォーラムにならなければならぬのに、一方的な意見だけを報道する不自由な新聞が大部分で、朝日もその例外ではない。意見とその表現の自由を、新聞によって代行してもらえないと感じている人は少なくない▼だから、デモにでも訴えようかという人の気持ちはわかるし、その自由を認めなければならないとも思う。問題は何が「普通」のデモかという点だ。ジグザグ行進を朝日は普通のデモと考えているようだが、そうか▼アルジェリア独立運動が盛んなころ私はパリでアルジェリア人の一大デモ行進を見た。警官の規制に従い整然とし、怒りの表情を沈黙に包んで、エンエンと続くデモは、強烈な迫力をもっていた▼それに比べると、ピーピーガヤガヤの鳴物入りウスマキやジグザグ・デモは、何の凄みもない。まるでお祭り騒ぎだ。お祭り騒ぎしなくても、十分に意見が表現できることは、前記アルジェリア人のデモでもわかる。普通のデモとは、それに伴う交通妨害を、必要最小限にとどめることでないのかね。

＊日本のいのちを貫くもの　明治神宮編

明治天皇のみことのり

●最新刊　600円〒160

明治維新以後、王政復古、百事一新の精神に基づき、明治天皇は内外の重要問題に対して多くの「みことのり」を渙発され、大政の方策を宣示された。本書はこの、明治の歴史・精神の神髄ともいえる「みことのり」のうち、一般になじみ深い23篇を精選、解説する。"明治のバックボーン"であり、かつ国家的飛躍の源泉であった天皇の大御心を理解感得するための最適の書である。●内容の一部　五箇条の御誓文　廃藩置県の詔　徴兵令制定の詔　国会開設の勅諭　陸海軍軍人に賜わりたる勅諭　教育に関する勅語　日清講和成立の詔…他。

読み下し原文に語釈・歴史的説明・現代訳を付け、さらに平明な解説を加えた、誰にも理解できる普及決定版！

日本教文社
東京赤坂9　振替東京55519